

# 台湾と一国二制度

放  
眼  
日  
中

今年になって台湾を3回訪れた。

何と言っても羽田―台北（松山）線の就航は大きい。東京の中心から台北市のど真ん中へ。このフライトで日帰りする出張者も増えていっている。また、食事も美味しく、日本人にはどこかほっとする雰囲気があり、台湾人気は着実に高まっている。

その台湾で近年注視されているのが中国の動きだ。中国から年間150万人を超える観光客（昨年）が訪れ、その観光収入が台湾経済を押し上げている。またここ20年、台湾企業による中国への進出の勢いは凄まじく、「人口の10%が大陸に移住した」と言われるほどだ。

「台商」と呼ばれるこれらの企業経営者がその利益を持ち帰り、台北の不動産に投資している、との話はよく聞く。実際、台北での不動産の高騰は北京や上海と同様の傾向にある、今や一般のサラリーマンでは購

入できないほどだ。

しかし、台商がなぜ台湾に投資するのか、という疑問もある。「台商とは名ばかりで、実際には大陸資本ですよ」と指摘する人もいる。その比率がどの程度なのか、計数的には把握できていないが、不動産ばかりではなく、企業の株式を買う例も出てきている。特に、メディアを支配下に置き、「大陸」を宣伝するに及んでは、目的もはっきりしているとかわざるを得ない。

馬英九政権誕生後、中国との緊密化が図られている。そして、そのことが従来かなりの抵抗感を持つて語られていた中台の統一にも変化を生み出しているようだ。特に若い世代を中心に、経済的な恩恵もあり、香港でも混乱がない「一国二制度」を許容する考え方があがる。50歳以下の人に聞いてみると、「いずれはそうなるのでは」といった、肯定とも諦

めともつかない回答が一般化しつつある。

これに対して70歳以上の世代の抵抗感は根強い。「65年前、国民党がやって来て台湾を駄目にした。今度は共産党が来てまたひどい目に遭う」とはつきり口にする高齢者もいる。この感覚と呼応するかのようには日本による統治時代に台湾に貢献した日本人を見直したり、かつての遺構を紹介したりといった一種のブームが出現している。

これは台湾人の複雑な感情を表しているであろうか。来年初めには総統選が行われる。多くの台湾人、在台湾邦人に選挙の行方を見てみたが、「かなりの接戦になるが、最後は国民党だろう」という意見が現状では多数を占めた。現職の馬英九氏が再選されれば中台関係が一挙に加速する可能性もある。そしてあと10年もすれば、本当に「一



コラムニスト・アジアウォッチャー  
須賀 努

すが・つとむ 東京外語大中国語科卒。金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。

国二制度」が実現するかもしれない。もちろん選挙は水物であり、最後は微妙な心理が働くことも十分考えられるが……。

ただ、この一国二制度、今や国内に大きな矛盾を抱える中国側にとつてはどうなのだろうか。大都市と地方の農村の格差は言われている以上に広がっており、まるで国内の一国二制度にも見える状況にある。ある研究者曰く「2020年以降、香港などと同样に上海や深圳に二制度が導入されてもおかしくない」。また、北京のある知人は「今や、純粹な社会主義体制下の都市は、中国には北京しかない」と言い切る。

いずれにしても、現状の良き台湾が残ってほしいと思うのは、日本人のエゴだろうか。いや、これは日本の国益にも関連する重要な問題であり、これから台湾の動向に注目すべきである。